

# 家のかげがえのなさについて

『空間の詩学』の空間化

ABOUT THE IRREPLACEABILITY OF HOME

Spatialization of “the Poetics of Space”

12223019

長島夏希

主査 宮 晶子

教授

副査 片山 伸也

教授

是澤 紀子

教授

本論で扱う内密性とは、子ども時代に秘密基地を作ったり、屋根裏部屋や押し入れに閉じこもったりする経験から生まれる、自分と場所が一体化して自己と対話する感覚である。このような経験は成長とともに減少し、社会に向けた意識が強くなる傾向がある。同様に、建築においても内向きの経験よりも外向きの経験が増えているように感じる。そこで、内密性を再び経験できる建築をつくりたい。内密な経験では、場所や建築物、物との結びつきが強固で、「かけがえのなさ」が生まれる。この「かけがえのなさ」は、愛着や思い入れが深い経験とそれに準ずる想像力が働くときに生まれるものと仮定し、その探求の一環としてガストン・バシュラールの著書『空間の詩学』を取り上げる。内密な意識を再評価するために、詩的なイメージを喚起する空間に焦点を当てたこの著書を分析し、得られた内密性の条件や、近年の建築の傾向などを既存の建築事例に適用する。その上で内密性が欠けがちである介護施設に対して「かけがえのなさ」を生む設計提案を行う。

**Keywords:** inner secrecy, irreplaceable, material imagination, recollection, reverie, poetic image

内密, かけがえのなさ, 物質的想像力, 想起, 夢想, 詩的イメージ

## 1. 序論

### 1-1 研究背景と目的

家が持つ内密性に興味がある。内密性とは、たとえば多くの人が子どもの頃に経験したような、秘密基地を作ったり、屋根裏部屋や押し入れの中に閉じこもったりしたときに感じた、自分とその場所が同化して、自分の内にぐっと入り込むような感覚を言う。このような体験は大きくなるにつれて自然と行わなくなり、社会の中で外に開く意識の方に目が向けられているように感じる。同じようなことが建築でも言える。自分の内に問いかけるような経験よりも、周囲に意識が開くコミュニケーションを誘発するような設計が増えていると感じる今、屋根裏部屋で体感した内密の意識を想起させ、再び経験する建築をつくりたい。

そのような自分の内に問いかけるような経験において、場所や建築物、物とわれわれ自身との結びつきは強固になり、この強い関係性によって「かけがえのなさ」は生み出されるのではないだろうか。「かけがえのなさ」とは、その対象と自分の間に、実際に愛着が湧くほど経験した、またはそれに準ずるような思いが働くことによって生じるという仮説を立て、後者の、対象物を深掘りするような想像力の働きについて研究をする。そこで対象を見て膨らむ、表層的

でない想像力＝物質的想像力や内密について論を展開しているフランスの哲学者、ガストン・バシュラールを取り上げる。これからの建築で再認識すべき内密の意識とはどのようなものか考察するため、彼の著書の中でも、詩的イメージを喚起させる身の回りの空間について論じた『空間の詩学』を分析的に読んで体系化し、既存の事例に当てはめ分析を行う。そこから得られた内密の条件、最近見られる建築物の傾向などから内密性が欠けがちな建築に対して設計提案を行う。

### 1-2 構成

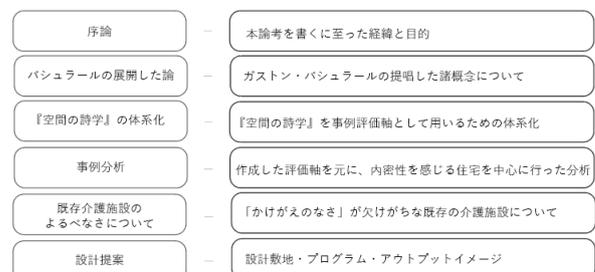


図1 構成図

## 2. バシュラルの展開した論

### 2-1 ガストン・バシュラルの専門の変遷

フランスの哲学者、ガストン・バシュラルは科学史研究者であり、エピステモロジー（認識論）研究者であり、さらには詩学の中心を成すイメージ研究の一大源流でもあるという、異なる分野をまたいで活躍した人物である。この両立しがたい分野を横断できた理由として、彼の哲学は人間の創造的な思考を総括的にとらえようとしていたことがある。

元来科学者として、純粋な真理の認識に関心を持っていたバシュラルは、科学的認識には完全な客観性が必要となり、その障害となるものとしてイメージを取り上げている。著書『科学的精神の形成』においてはイメージを集め否定的に分析している。客観的認識のために記されたため、この本ではイメージは否定すべきものとして扱われているが、同時にイメージが果たす機能が多方面に及んでいることが明らかになる。この機能について及川氏はこのように述べている。

「人間の単なる空想や想像だけでなく、ものの映像にその人間の感情や経験を加味して知的作用を一手に引き受けていた、といってもさほど誇張にはならないであろう。(中略) このイマージュを肯定的に見ることはできないだろうか。これほど強力な根を人間性のなかに深くおろしているものを活用している分野はないだろうか。」

(\*1)

このように、イメージが人間に及ぼす影響の大きさを実感し、それを肯定的に捉え生かす分野としてイメージ研究による詩学の分野に進出する。本論で取り上げる『空間の詩学』もこのようにして執筆された経緯を持つ。それまでイメージを四大元素（火・水・空気・大地）に基づき論じていたバシュラルが、新たなテーマとして空間を扱ったのは、なによりもまず「人間は家のゆりかごのなかに置かれる」ことで世界に存在し始めるのであり、空間、とりわけ家と人間の存在が深い関係で結びついていると考えるからである。本書において注目する視点は、人をとりまく様々な空間がどのような詩的イメージを喚起させるのか、それぞれの要素について詩を用いて分析している点である。この詩的イメージの喚起に大きく関わるものとして、物質的想像力がある。

### 2-2 バシュラルの論における諸概念

バシュラルが展開する論において重要で、かつ理解するための補足が必要だと考えたものについて以下で述べていく。

#### 形式的想像力と物質的想像力

想像力には形式的想像力と、物質的想像力の2種類がある。(図2) 形式的想像力とは、色や形といった視覚によって捉えられる外見上の要素から他の対象との類似性を連想させるような想像力のことで、物質的想像力とは、匂いや手触りといった身体的要素を膨らませてその対象の表層ではなく深いところに対して働かせる想像力のことである。バシュラルの想像力について、及川氏は「想像力を、たんにイマージュの再現力として静的に捉えるのではなく、イマージュを変形する能力とみなし、イマージュに力動性をあたえる能力とする。そのためには形相因より質量因を、つまり形態より物質を重視しなければならないという自覚に達する。」(\*2)とまとめている。本論では、物質的想像力を中心に置いて論を展開する。想像

力が働くときに展開される観念が、次のイマージュと夢想である。

#### イマージュ

イマージュとは心に浮かぶ観念像のことであるが、それは事物の完全な模倣ではない。思い浮かべられるイマージュは、それを浮かべる人がその事物にどのような思いを抱いているのか、またその事物とどのように関わって育ってきたかにも左右される。

#### 夢想

夢想とは、デジタル大辞典によると「夢のようにあてもないことを想像すること」とある。しかしバシュラルによると、人の精神活動を、客観的思考を行うべき覚醒した意識と、その対極に置かれる深い眠りや夢を見る無意識の深層とに二分するとすれば夢想に割り当てているのはその中間帯であるとされる。夢想は夢のように意志や理性といった制御を完全に外れることはなく、また夢が線的に進むのに対し夢想は放射状に働くという。次章の『空間の詩学』で取り上げられる詩的イメージが生まれるのも、この夢想の状態の中である。

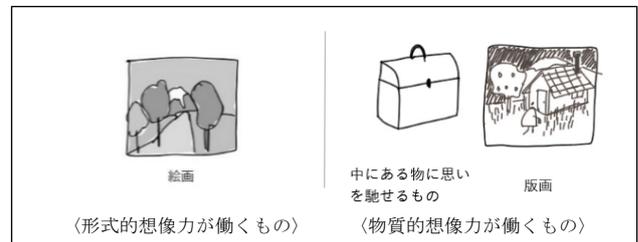


図2 形式的想像力と物質的想像力



図3 イマージュとは

図4 夢想とは

## 3. 『空間の詩学』の体系化

ガストン・バシュラルの著書『空間の詩学』では、全10章でそれぞれの項目について説明している。これらの項目は、建築的な要素から小さな物体、ひいては概念まで、大きい/小さい、具体/抽象を飛び越えて、それらにたいして物質的想像力を働かせて詩的イメージを喚起させている。見た対象からの直接的イメージに自身の感情や経験をのせて物質的想像力を働かせることは、人とその対象に結びつきが生じ、かけがえのなさが生み出されると考える。これを設計に用いるために、物質的想像力を働かせる要素とはどのようなことなのか、またそれらが建築においてどのように働いているのかを『空間の詩学』を用いて調査する。

建築の評価軸として活用するために、まず各章の概要をまとめ、次にまとめたことを建築の要素として言い換え・構造化し、最後に内密性評価軸として用いるための4つの要素に分類する。

### 3-1 『空間の詩学』の各章について

この本で取り上げられる、人をとりまく空間の様々な要素を章ごとに要約する。ここで取り上げられる要素は、物質的想像力を働かせることでそこから詩的イメージが生まれている。

#### 3-1-1 第1章「地下室から屋根裏まで 小屋の意味」

家は人にとっての最初の宇宙で、人間に原初性を与えるものとして存在し、安心感という幸福を人間に与えてくれる。記憶と想像力が相互作用的に働き、思い出と夢想・イメージの共同体を作り上げている。屋根裏部屋や地下室の明／暗、上昇／下降という環境変化や肉体変化がその場所との記憶と大きく関わっている。

#### 3-1-2 第2章「家と宇宙」

家の周囲の環境や季節により家のイメージが変わることがある。また、外皮(外壁)の厚さによって、たとえば嵐のときの人の意識が外部に向くか、家自体に向くかが変化する。建築物の構成が単純であるほど想像力が働き追体験の中で自分を住まわせることができる。

#### 3-1-3 第3章「抽出箱 および戸棚」

戸棚や箱といった閉じられたものは我々に想像力を与えるとともに安心感も与える。人間の心と同じような中性を持ち、自己同一化した記憶が自動的に入っていく、夢がつかまっている。

#### 3-1-4 第4章「巣」

人間にとって巣、すなわち家とは動物が肉体的な幸福を感じてひきこもる隠れ家のようなものである。鳥は自分の胸を押し当てて巣を形作ることから巣はその鳥にとって完全なるオーダーメイドであるし、巣は内部によって支配されている。

#### 3-1-5 第5章「貝殻」

貝殻はその形が秩序を持ち幾何学の力が強すぎるゆえに夢が広がらないが、どのように形成されたのかという形成過程の方が神秘的であるため夢を広げることができる。

#### 3-1-6 第6章「片隅」

片隅は部屋の胚珠で、扉や壁で囲われた部屋ではなく心理的に認識する領域である。人は自分と片隅という空間を同化し、そこから夢を広げていくことができる。片隅は、人が片隅と空間と同一化する(集中)と片隅から飛び出すと同時に自己を認識する(出現)という二つの性格を持つ。

#### 3-1-7 第7章「ミニアチュール」

壁の亀裂や溝などの観察対象の中に自身を小人にして入り込ませその中で夢想やミニアチュールを展開すると、入り込んだ人は大小の拘束から解放されるため、ミニアチュールは大きさの隠れ家である。

#### 3-1-8 第8章「内密の無限性」

想像力は無限性のイメージを拡張することができる。無限性は我々の内にあるため、イメージ同士が影響を及ぼしあい、集中と拡散という二つの運動によりイメージは膨らんでいき、イメージは無限となる。その無限のイメージは自身の内密を夢想させるものとな

る。

#### 3-1-9 第9章「外部と内部の弁証法」

我々は内部と外部というものを考えるときに、それらを対立のものとして簡約化して考察してしまうが、イメージの誇張を行わなくてはならず、外部と内部はともに内密である。

#### 3-1-10 第10章「円の現象学」

現存は円だという言葉をもとに、存在は中心に集中するイメージを持つ。中心の存在から生成される外へ拡散するイメージと、内へ向く中心の存在が拮抗することで世界をつくっている。

### 3-2 『空間の詩学』の言い換え

『空間の詩学』の各章で記述されている具体から抽象までを、建築の評価軸として作用させるために構造化していく。

まず各章で述べられている要素を用いて建築を評価するにあたって、キーワードを抽出し、どのようなことを言いたいのかを完結にまとめる。それが以下の表2である。

表1

|    |          |   |                             |
|----|----------|---|-----------------------------|
| 1  | 地下室と屋根裏  | → | 明確の変化や、上下運動による場所移動の感覚。      |
| 2  | 嵐とネガ・ポジ  | → | 家と人の関係を計る変数と、外皮の丈夫さ         |
| 3  | 戸棚       | → | ひらかれる事物(開・閉)                |
| 4  | 身体的巣     | → | 内部の要素によって建築が規定される           |
| 5  | 記憶の片隅    | → | 置かれたものがそこにいる人や時間の記憶を保持する。   |
| 6  | 貝殻       | → | 形成の過程に対する夢想、人間の存在の象徴(家そのもの) |
| 7  | 単純な小屋    | → | 単純な構成                       |
| 8  | 片隅       | → | 身体・精神の拠り所として場所と自身を同化させる     |
| 9  | 蜘蛛・てんとう虫 | → | 場所から放たれることで自身の存在を認識する       |
| 10 | 版画       | → | 版画の溝に意識の中で身をもたげる            |
| 11 | ミニアチュール  | → | 自分を小さなものに入り込ませ空間として認識する     |
| 12 | 無限       | → | 屋外の原っぱや森                    |
| 13 | 内部と外部    | → | 人間は半は開いた存在(内部と外部を切り離せない)    |
| 14 | 円        | → | 外側に向かい放射する内からの意識            |

次にそれらを理解しやすくするためにビジュアル化する。

「地下室と屋根裏」では階段の昇降のイメージを、「嵐とネガポジ」ではどこに意識が向いているかのイメージを、「身体的巣」では鳥によって内部から形作られているイメージを、「貝殻」では事物の生成過程のイメージを、「単純な小屋」では簡単な幾何学によって構成されているイメージを、「ミニアチュール」では大きさを超越し小さなものに入り込むイメージを、「円」では内へ向く矢印と外で放射する矢印が拮抗するイメージを、それぞれ表現した。

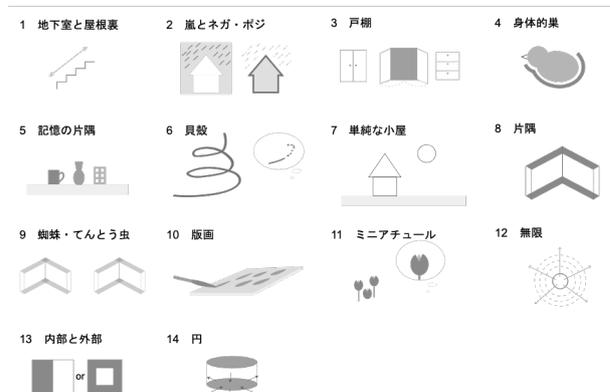


図5 『空間の詩学』のビジュアル化

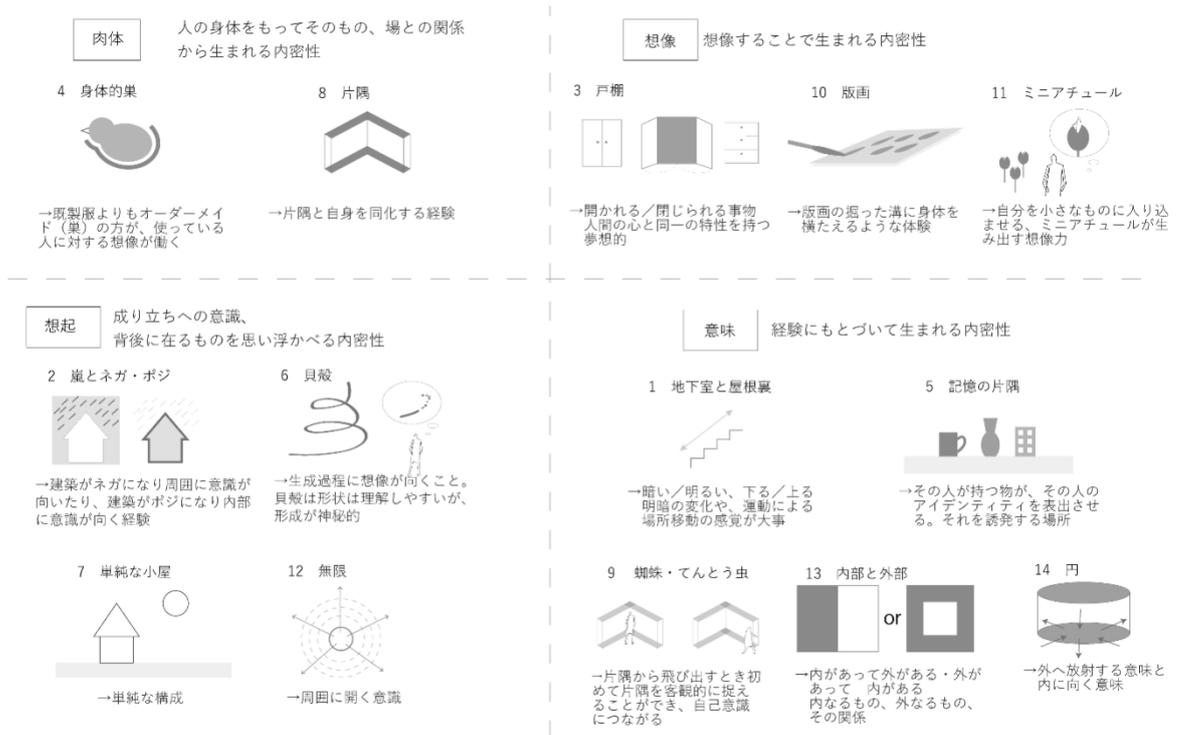


図 6 肉体的内密、想像的内密、意味的内密、想起の内密

### 3-3 『空間の詩学』の内密性評価軸分類

3-2 で言い換えた 14 項目はどのような内密性を生み出しているのかを考察した結果、それぞれ肉体的内密、想像的内密、意味的内密、想起の内密の 4 種類の内密性に分類することができた。(図 6)

- ・ **肉体的内密**: 人の体をもって、その場との関係を感じるような内密感を持たせる要素。具体的には、壁と壁の隅に身をもたげたり、自分の体が収まる場所を見つけるようなこと。
- ・ **想像的内密**: 想像することで内密が生まれる要素。たとえば戸棚を見て、その中にしまわれた自分の大事なものを想像するなど、直接は見えていないことでむしろ想像が働くこと。
- ・ **想起の内密**: 物事の成り立ちへ意識を向ける、またはその背後にあるものを思い浮かべることで生まれる内密性。具体的には、構成を思い浮かべたり、元いた場所のことを考えたり、周囲の環境のことを思うことである。
- ・ **意味的内密**: たとえば、地下室は暗い、屋根裏は明るいというような、経験にもとづいて得られる意味を表象したような内密性を生み出す要素。

これら 4 要素を軸として建築事例について分析したのが次章である。

## 4. 事例分析

この章では、『空間の詩学』で語られるような物質的想像力が働くことにより感じられる内密性について、実際の建築物では具体的にどのような部分に当てはめられるのかを探るため、全体、または部分、またはその両方で内密的であると感じた、経験したことがある

建築物を中心に、3 章でまとめた『空間の詩学』的建築評価要素を用いて分析を行った。以下の表 2 が分析を行った 18 の事例である。

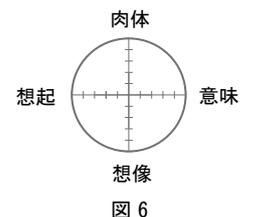
| 作品名            | 設計者          | 用途        | 主要構造     | 延べ床面積      | 竣工日         |
|----------------|--------------|-----------|----------|------------|-------------|
| 中心のある家         | 阿部聡          | 住宅        | RC-木造組   | 102 ㎡      | 1974 年      |
| 美しが丘の家         | 阿部聡          | 住宅        | RC+木造    | 221.25 ㎡   | 1983 年 5 月  |
| 那須の山荘          | 高橋子/STUDIO2A | 別荘        | 木造在来構法   | 89.58 ㎡    | 1998 年 4 月  |
| house1         | 高橋子/STUDIO2A | 住宅        | RC 造     | 108.41 ㎡   | 2009 年      |
| 食堂のなわ          | 高橋子          | 住宅        | 木造在来構法   | 63.85 ㎡    | 2015 年      |
| 田園川高弘邸         | 吉村順二         | 住宅        | 木造       | 77.0 ㎡     | 1935 年      |
| some art house | BLD          | アートハウス    | RC 造     | 840.89 ㎡   | 2021 年 7 月  |
| 栗山の小屋          | 岐阜和世建築設計事務所  | 別荘        | 鉄骨造      | 107.85 ㎡   | 2010 年 3 月  |
| 柳林の家           | 岐阜和世建築設計事務所  | 住宅        | 鉄骨造      | 77.68 ㎡    | 2003 年 10 月 |
| 森止邸            | 西沢立衛建築設計事務所  | 住宅        | 鉄骨造      | 263.32 ㎡   | 2005 年 10 月 |
| 張邸邸            | 原広司          | 住宅        | RC 造     | 236.4 ㎡    | 1972 年      |
| 安部邸            | 針谷裕史建築設計事務所  | 住宅        | 鉄骨造      | 190.35 ㎡   | 2022 年 12 月 |
| 清田の集合住宅        | 武田清樹建築設計事務所  | 集合住宅      | RC 造     | 465.93 ㎡   | 2022 年 12 月 |
| 橋岡邸            | 武田清樹建築設計事務所  | 住宅        | 鉄骨造      | 206.72 ㎡   | 2021 年 6 月  |
| TemaeH         | 自主坂事務所       | 事務所・複合・住宅 | RC 造     | 151.72 ㎡   | 2003 年 10 月 |
| 高橋の家           | 萩原勇          | 別荘        | RC-木造+鉄骨 | 224.69 ㎡   | 2022 年 4 月  |
| 門脇邸            | 門脇耕二+        | 住宅        | 鉄骨造      | 106.20 ㎡   | 2018 年 4 月  |
| Greco          | 眞子裕隆建築設計事務所  | 集合住宅      | 鉄骨造      | 1,106.39 ㎡ | 2023 年 3 月  |

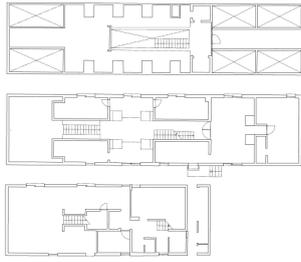
表 2 分析事例

### 4-1 分析方法

『空間の詩学』を具体化したものを各建築に当てはめて評価する。それぞれの項目において◎○△×の 4 段階で評価し、◎を 1、○を 0.5、△を 0.25、×を 0 として数値化し、パーセンテージを求めてレーダーチャート(図 6)にまとめ、どの内密性が強いのか、傾向を分析した。以下の図 7 がその一例である。

さらにレーダーチャートで数値化できない、『空間の詩学』的評価軸からは逸脱するものの、内密性やかけがえのなさを感じたことについて、特記要素として分析、それが起こる理由として考察する。





- 4. 身体的異 → 居住部は○、アトリエ部は△
  - 8. 片隅 → ○
  - 3. 戸籍 → ○ 明るいボックス、階段の戸籍
  - 10. 版図 → ○
  - 11. ミニアチュール → ○ 壁のビーコン、タイルの目地
  - 2. 嵐とネガとボジ → ○
  - 6. 長短 → ○
  - 7. 単純な小屋 → ○
  - 12. 雑居 → ○ 内との関係
  - 1. 地下室と屋根裏 → ○ 下がるほど開放的な気候、ただ明確な
  - 5. 記憶の片隅 → △
  - 9. 蜘蛛・てんとう虫 → ○ 黒闇がよく見える隅
  - 13. 内部と外部 → ○ 室内における内外
  - 14. 円 → ○ 中心の軸
- すべての項目において内密的だといえるが、特に想像的内密で顕著である。

図7 分析事例の一例（栗津邸）

4-2 分析結果

レーダーチャートをまとめると以下の図8のようになった。全体を概観して、特徴的だと感じたことについて述べていく。

4-2-1 すべての内密性を満たす事例

全体の結果を俯瞰し、すべての項目の内密性を75%満たす事例が複数あった（〈中心のある家〉、〈美しが丘の家〉、〈那須の山荘〉）。これらの事例では、壁による明快な構成により肉体的かつ自分の位置を片隅に据えながら、無限的に感じられる共通点があった。（図9）。



図9 すべての内密性を満たす事例

● 肉体 ● 想像 ● 想起 ● 意味

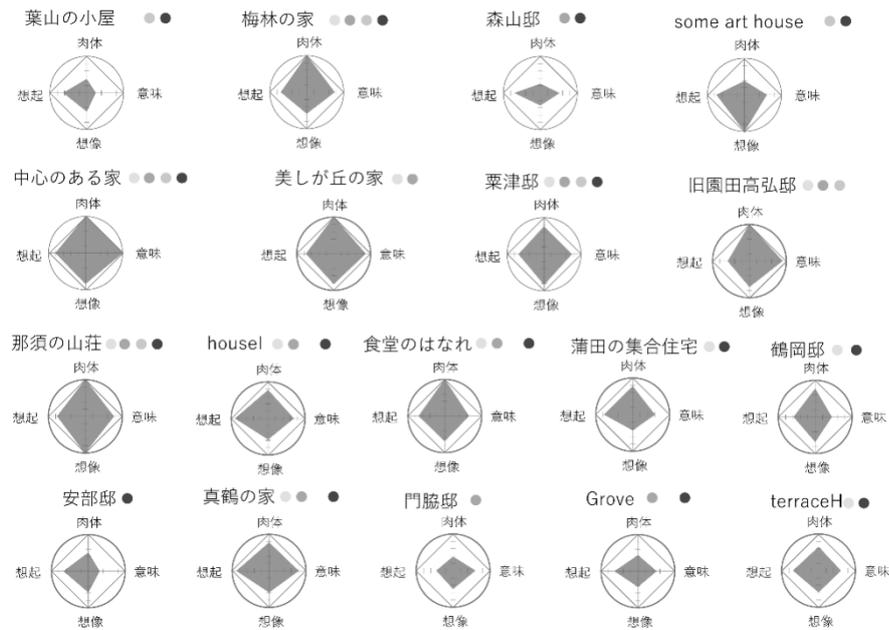


図8 レーダーチャートまとめ

4-2-2 レーダーチャートに特徴が見られた事例

全体を満たす前段の事例と比較し、内密性に偏りが見られた事例や経験の記憶と差があった事例について考察する。

・ 想起的内密性・想像的内密性に偏った事例

〈some art house〉では、想起的内密や想像的内密を満たしており、肉体的内密はあまり満たされていないという結果が得られた。この事例では建築の規模ゆえに肉体的内密は満たされなくとも内密的な経験ができたと感じた。その理由として、広い空間の中で、場所ごとに海という無限に感じられる対象とぐっと細部に注目する対象（ミニアチュール）が結びつき、建築と人の結びつきになっていることが挙げられる。このことから、肉体的内密のない場合でも、想像的要素と想起的要素が組み合わせることで総合的な内密が生まれる。



図10 some art house

・ 意味的内密性に偏った事例

〈門脇邸〉では、意味的内密性に偏った結果が得られた。物の居場所が多くあったり3階が屋根裏のように感じられたりするなど、意味的内密性を多く満たす。しかしこの事例では内密的な経験は得られなかったように感じた。その理由として、この事例では設計者も述べているように、諸室を構成するエレメントを個別に設計していき、部分を読み解いても想起によって構成される全体像（無限）を感じとれず、自身と建築が結びつかないような設計の仕方をとっているからだと考えられる。

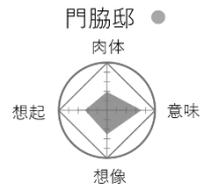


図11 門脇邸

本論考で求める内密性を満たすためには、自分の肉体を感じ、かつ構成を頭で理解する無限を感じられる必要がある。

・ 経験した記憶よりも小さい結果になった事例

〈安部邸〉や〈Grove〉は柱が特徴的に表れる事例である。『空間の詩学』では、壁や扉でさえも片隅を生み出すと述べられていたが、柱や壁柱もそれにあたると考える。これらの事例を数値化した結果、内密性は少ないという結果になった。しかし片隅は生まれずとも柱が人間と同じような登場人物として生活の中に表れる様子は、かけがえのなさに繋がる感覚を覚えた。このことから、必ずしも肉体的な片隅がなくとも精神的な片隅としての拠り所は生み出せると考える。

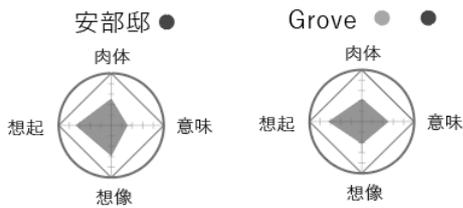


図 12 経験した記憶よりも小さい結果になった事例

・ 外皮の厚さについて、類似事例の比較

〈葉山の小屋〉と〈梅林の家〉を比較する。これらは、外皮（外壁）が薄いところが共通する。外皮は薄いほど外部に意識が働き、建築がネガの状態になるはずだが、この二つの事例では結果に大きな差が出た。「葉山の小屋」では、ガラスによって概念的には囲われているが肉体的囲われ感が弱いことから、「内部」を感じにくく、それにより外部の環境に意識が向きにくいことがわかった。一方「梅林の家」は外皮が薄いことで、外部へと意識が向く。このことから、内外のゆらぎを生み出すには、外皮の厚さだけでなく、開口の大きさなどによって、今居る場所が内部だと、肉体的・意味的に感じられる必要があることが分かった。

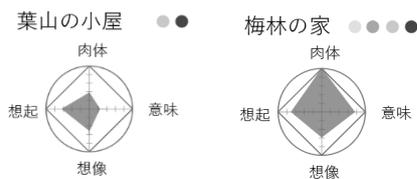


図 13 類似事例の比較

4-2-3 意味的内密性・想像的内密性を満たす事例が少ない

本分析で肉体的内密を75%以上満たした事例は10、想起的内密では12、意味的内密性では6つ、想像的内密性では4つであった。このことから意味的内密性や想像的内密性は、肉体・想起的内密性と比較が少ないことが分かる。意味的内密とは、階層ごとの明暗差や、片隅に置かれるものにより記憶が保持されるような場所や、中心を感じさせることで生じるものであり、近年の建築物の潮流として階層ごとに変化を持たせない普遍性や、場の多様性を持つ建築物が多く見られているため、意味的内密性を持つ事例は少ない傾向にあると考えられる。

また、想像的内密性は、戸棚など隠されているものに対して内部を夢想し、自身が持つ記憶の戸棚といった感覚と同化することによって得られる安心感や、テクスチャーなどの凹凸やすき間に自身を入り込ませる夢が働くことによって生じるものであり、建築全体から考えると規模の小さいものであり設計の最後に付加的に用いられる傾向がある。また、少し年代を遡った建築では収納を壁化し、そこに収納があることを想像させないような事例も多く、さらには開くことが良しとされる昨今の傾向を見ると収納も空間と一体になって開放的であるように考えられるし、強いテクスチャーを用いないことも建築の普遍性に繋がるため、想像的内密性を満たす建築が少ないことは近年の流れとも考えられる。

4-3. 考察まとめ

分析を行い作成した4項目のレーダーチャートの傾向と、自身の経験の関係から以下のことが考察できる。

- ・ 肉体的内密や意味的内密が多い場合でも、想起的内密がないと、経験としての内密性には繋がらない。
- ・ 内密の感覚に繋がりがやすい肉体的内密性を満たさなくても、想像的内密と無限の組み合わせで経験としての内密性は生み出せる。
- ・ 想像的内密は全体的に少なく、現代建築では蔑ろにされている。

これらの考察を元に設計を行っていく。

5. 設計提案に向けて

前述の通り、『空間の詩学』の内密性を感じる種類によって分類した4要素のうち、意味的内密性や想像的内密性を優先して満たす事例は少ない傾向にあった。それは近年の建築物の作り方の傾向や、設計する際に何から考えるのかによってそのような傾向が見られると考察した。

かけがえのなさとは、何か対象に対して抱く特別な感情であるが、その対象との関係は直接的な関係の濃さだけではなく、その対象を通して自分の過去経験のある別の対象と結びつくことでも生み出せるのではないかと論を進めてきた。『空間の詩学』で論じられた、対象から物質的想像力を働かせて生み出された詩的イメージとはまさにそのようなもので、事物を見て過去の経験や知識と組み合わせさせて夢が引き起こされる。

建築物を使う人が、建築物やそこにある空間に対して自身と結びつけながら夢想することは、その建築物と関係する時間の長さに関係なくかけがえのなさを獲得する方法になると考える。そのためにその場にいなくても思い出される、または自分が過去に経験した同じような意味を持つ空間を思い起こさせるような意味的内密性や強い夢を引き起こす想像的内密性は、想像力を働かせることによってかけがえのなさを生み出させる建築物には必要であると考え、本制作では意味的内密性・想像的内密性から建築物を設計するという、通常的设计で抜け落ちているところから設計を行うというプロセスを取る。

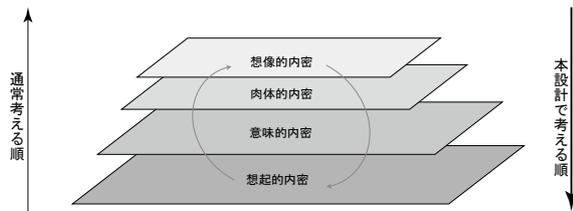


図 14 本設計プロセス

## 6. 介護施設の寄る辺なさに関して

前章まで物質的想像力が働く対象と、その対象に対してこちらが働かせる夢によってその対象とのかけがえのなさが生まれると述べてきたが、これが欠けている状態を考察する。

今自分が存在している場所が、肉体として存在はしているけれど「自分の場所」だと思えない状況は充足感の欠如に繋がる。「かけがえのなさ」に対して「よるべなさ」と表現する。具体例として老人ホームを挙げる。この施設は長年住んできた家から離れ、違う環境で、今まで所有していた物も一部しか持ち込むことができず、備え付けの家具に収納されていく。ガストン・バシュラールが『空間の詩学』で取り上げた、「幸福な空間のイメージ」からは遠いところにあるのが、現在の介護施設であると言える。そこで、前半で考察したことを用いて、現在の老人ホームをはじめとする介護施設の「よるべなさ」が「かけがえのなさ」に変わるような設計提案を行う。まず既存の介護施設の状況を文献調査する。

### 6-1 介護施設の形態について

老人ホームの種類には大きく分けて行政機関が管轄を行う公的施設と民間施設があり、その中でも病状や介護度合いによって種類が異なる。たとえば公的老人ホームである特別養護老人ホームは、原則介護度が3以上の方の終の住処として挙げられるが、民間老人ホームと比較して費用が格段に安いことなどから待機者が非常に多い状況で、厚生労働省によると令和4年には全体で27万人以上が待機しているなど、施設によって入所状況にばらつきがある。

各施設の大まかな特徴は以下の図15の通りである。

| 施設の種類 | 制限   | 施設名・特徴        |                                | 要介護度          |
|-------|------|---------------|--------------------------------|---------------|
|       |      | 施設名           | 特徴                             |               |
| 公的    | 限定あり | 介護老人保健施設      | リハビリをして在宅復帰が目的<br>入所期間は原則3~6ヶ月 | 要介護度1~        |
|       |      | 特別養護老人ホーム     | 原則要介護度3以上（介護状態が重い）の方の終のすみか     | 要介護度3~        |
|       |      | 介護医療院         | 慢性的な医療ケアを受けながら生活する場            | 要介護度1~        |
| 民間    | 限定なし | グループホーム       | 認知症専用の介護施設                     | 要介護度2~<br>認知症 |
|       |      | 介護付き有料老人ホーム   | 特徴は施設によって変わる<br>24時間介護スタッフは常駐  | 65歳以上         |
|       |      | サービス付き高齢者向け住宅 | 生活サポート付きの高齢者専用<br>バリアフリーの賃貸住宅  | 60歳以上         |

図 15 介護施設の種類

### 6-2 先行文献研究

老人ホームで行われている生活に、前半で調べ、「かけがえのなさ」を感じるために必要であると考えた、物質的想像力の働く要素はどれほどあるのか、内密性はあるのかを先行文献を用いて調査する。

#### 6-2-1 しつらえに関して

ある先行文献によると、特別養護老人ホームにおける、部屋のしつらえ（所持品や装飾）の数が多くの方が、その後の介護度が維持、または改善される事例が多いことが見受けられる（田島・大原・王・藤岡, 2021）。『空間の詩学』で述べられていた想像的内密性がこれにあたりと考えられる。

#### 6-2-2 平面構成に関して

1980年代までの、多床室と施設内に一カ所の大食堂という構成から、1990年代に質を重視する方針に移り、個室化など10名前後の入居者がひとつのまとまりを構成し、家庭的な居室環境の元で生活する「ユニット」をそなえる特養が増加、ユニットケアの有効性を後押しし、2002年度よりユニット型特養が制度化された。（水野・毛利, 2022）

#### 6-2-3 リロケーションダメージに関して

リロケーションダメージとは、それまで暮らしてきた物的・人的環境から離れ、新たな環境での生活によって引き起こされる身体的・精神的・社会的な痛手のことである。特に高齢者にとって大きな問題であり、リロケーション後に環境の変化による身体症状の悪化やそれに伴う生活への支障、また自尊感情の低下や精神活動の低下などが見られる傾向にある（赤星・田場・山口・砂川, 2018年）。リロケーションダメージが今までの環境と何の結びつきのない環境に身を置いた際に起こることから、自身との結びつきを想起させる操作は有効であると考えられる。

## 7. 設計提案

### 7-1 プログラム

既存介護施設について調べたところ、施設数としては民間の有料老人ホームが一番多く、次いで民間のグループホーム、次に公的な特別養護老人ホームの順で多いことが分かる。利用者数は特別養護老人ホーム、次いで有料老人ホーム、その次に公的機関でリハビリ等を中心とする介護老人保健施設が多い。

前章にて、リロケーションダメージについて取り上げた。自宅での介護が難しい、また高齢の親を一人で生活させるのが心配だという理由からやむなく自宅から他所への移転を余儀なくされるケースは多いだろう。介護士など信頼できる他者の目が届くところにいられる周囲の安心とは裏腹に、当事者は環境の変化に伴い精神状態が悪化したり自尊感情が低下したりすることが多い。それほど、思い入れのある場所や人との関係は人にとって欠かせないということが伺える。このような状況において、著しい身体機能や認知機能の低下はなく入所する場合、また炊事や洗濯といった身の回りのことを自分でなくなる場合にリロケーションダメージは顕著に出るのではないか。このような観点から介護施設のうちどの形態を設計するか考え、入居条件が厳しくないため支援の状態の人から看取りまで幅広く受け入れており、1日のプログラムが決まっていて自立した生活ではないと考察できる介護付き有料老人ホームを設計対象として取り上げる。

## 7-2 敷地

敷地は神奈川県川崎市多摩区の郊外住宅地にある。

選定敷地は、京王稲田堤駅から15分ほどの場所に位置する。小沢城址とその周辺の緑地保全地区を背にして、市街地との間に位置する。周辺の環境が、緑地と住宅と二つの顔を持ち、窓による切り取り方によって無限性を生み出せると考察しこの場所を選定する。



図16 敷地航空写真

## 7-3 設計

4章でまとめた分析や考察から意味的内密・想像的内密から設計を行う。具体的には、想像的内密では戸棚などの表面が見えていて中が見えないことによって物質的想像力が働く収納や小部屋、テクスチャーなどの触感を感じるものを作ること、意味的内密では階の上り下りなどに伴う明暗の差による場の経験の記憶や、物が記憶を保持する片隅や、内部と外部が拮抗するような場や、中心への意識と外に放射する意識の両方を持つ場を作ることから始める。

まず最近の傾向として好まれる、複数個室で生活ユニットを形成するユニット型個室を参考に、内外の意味を併せ持ち、片隅を多く持つ入れ子構造の個室を中心に設計を行う。

### 7-3-1 アウトプットイメージ

入れ子構造の個室は、窓を設けることで中の部屋が戸棚のような小部屋のような想像力の働く空間になる。幅1200mmの壁のすき間は、プライベート空間へのクッションになる上、物やそこに居る人が記憶を保持する片隅になる。

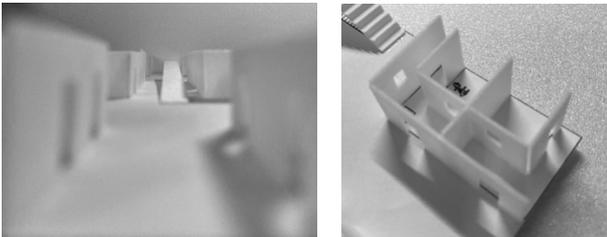


図17 ドローイング・スタディ模型

## 8. まとめ

「かけがえのなさ」という、言葉にはできないけれどどれも感じたことのある気持ちがどのように生じているのかを追求するところから、「かけがえのなさ」とはそう感じる事物に自分の経験や記憶やその時々感情を織り込ませることで生み出されることを理解した。本研究で考察した内密の感覚とは、誰もが子供の頃、または生家での生活で感じたことのある感覚ではないだろうか。『空間の詩学』を用いることでそのような漠然とした内密の感覚を、具体的に抽出し、設計の材料として体系化できたことは今後も設計を行う上での大きな足掛かりになるだろう。

高齢化社会で、家での看取りから外部サービスの力を借りるようになった昨今でも、最期は家がいいという人が多い理由として、住み慣れた家には自分との結びつきが多いことが大きい。家ではない場所で最期を迎えるとしても、本研究で追求した内密の感覚や物質的想像力を働かせた結果生み出される「かけがえのなさ」の感覚はそのような当事者の感情を少しでも満たすことはできるのではないだろうか。

### 参考文献

- 1) 及川 靄：バシュラールの詩学,法政大学出版局,第一版,1989年3月10日
- 2) 及川 靄：原初からの問い,法政大学出版局,第一版,2006年,9月30日
- 3) ガストン・バシュラール,空間の詩学,筑摩書房,第12版,2021年4月20日
- 4) 楠木雄一郎・友清貴和・西室田周作：N特別養護老人ホームにおける入居者の居場所と居室のしつらえに関する考察,日本建築学会大会学術講演会梗概集 関東,2001年9月
- 5) 水野弘崇・毛利志保：ユニット型特別養護老人ホームにおけるユニット内外の関係性の再考,日本建築学会関東支部研究報告集II,2022年3月
- 6) 赤星成子・田場由紀・山口初代・砂川ゆかり：国内文献にみる高齢者のリロケーションに関する研究の現状と課題ーリロケーションの理由とリロケーションダメージに着目してー,沖縄県立看護大学紀要19号,2018年5月
- 7) 新島 充：SD2023,鹿島出版社,2023年12月20日
- 8) みんなの介護：<https://www.minnanokaigo.com/>,2023年12月24日閲覧
- 9) 新建築データ：<https://data.shinkenchiku.online/>,2023年11月12日

### 引用文献

- 1) 及川 靄：バシュラールの詩学,財団法人 法政大学出版局,第一版,1989年3月10日
- 2) 及川 靄：バシュラールの詩学,財団法人 法政大学出版局,第一版,1989年3月10日